

SRID NEWSLETTER

No. 393 September 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.sridonline.net>

地域経済統合と文化の相違	日本福祉大学	今井 正幸
海の向こうで：小さな国際人たち	ボンタン LNG トレイン H 投資 (株)	宮入 宣人
グローバルフェスタ参加お知らせ	学生部	大塚 美奈子

=====
お知らせ

1. 第 6 回幹事会

日時：2008 年 9 月 29 日(月) 午後 6 時 30 分から 8 時 30 分

会場：UNIDO 東京投資技術移転促進事務所

地下鉄半蔵門線 半蔵門駅 1 番出口から徒歩 1 分

2. 大来記念特別講演会

日時：2008 年 10 月 23 日 (木) 午後 6 時から 8 時頃まで

会場：国連大学 学長会議室 12 階

講師：川口順子 (元外務、環境大臣、現参議院議員)

テーマ：京都議定書をめぐる国際交渉について

3. ニュースレター No.394

菊地氏 安積氏 秋田氏

地域経済統合と文化の相違

日本福祉大学 今井 正幸

「欧州の国々は文化が共通しているから地域統合が可能であったが、アジア各国は文化が異なるので統合はできない」とするものが近年枚挙に暇がない。

南アジアの専門家として著名な原洋之介はその初期の著作からこの説を主張し、2004 年には日経に「共通の文化により欧州が統合への道を歩んだのは不可避的であった」とさえ述べている。他方、欧州の専門家は「そんな馬鹿な」と反応するだけで「文化の差異の大きさから、アジアの経済統合は困難または不可能である」との説には関心を示さない。

この「文化の違いによる障壁」という命題に対する筆者の関心は、筆者が1972年パリ大学に留学していた時の恩師である G. Leduc 教授が当時のアフリカの経済統合に言及し「これらの国は近代的国家の制度や枠組みに文化の相違が組み込まれている深度が浅いから、各文化の差が統合の障壁となる度合いは欧州の場合ほど大きくはないであろう」と言われたことに起因している。爾来、折に触れこの命題を想起、反芻している。

アジアの国々に文化の違いがあるのは当然であり、筆者も60年代の初めに東南アジアを訪れた時から実感している。そして欧州の文化も国によって違っているのを訪欧するたびに実感している。2007年の中南米の経済統合に関するセミナーで「中南米は文化が共通しているが、アジアは文化が大きく相違している」との発言があったので反論した。主催者側もこの反論に同意したように中南米も各国の文化は異なっているのである。欧州が文化の共通性によって必然的に統合したならば、統合に延々と半世紀も要したことも、途中で何度も遭遇した瓦解の危機も、内包する諸問題も説明がつかない。

アジアの経済統合を考察するとき、EUの進展過程からいかに多くの示唆を得て、教訓とするかが大きな課題である。「EUからレッスンはいくらかでも得ることができる」とは国際機構の専門家である Science. Po. の Le Casheux 教授も述べている。もちろん、彼我の差異は常に考慮に入れなければならないが、文化の差の大小論は外して欲しい。「自国と近隣諸国だけは極めて異質だが、他地域はそれぞれ文化が共通している」という説は外国の文化に無知であることを曝しているように思われる。EU各国が異なる文化を互いに許容しながら統合に向けて歩んできたのは、実際に当事者である EU 加盟諸国が「異なる文化のうちでの統合」と自称していることからわかる。

筆者はこの「文化」と呼ぶ広範な対象または曖昧な捉え方で「欧州は同一、アジアは多様」と決め付けることには抵抗がある。それは、しばしば文化の違いを、アジアにおける協調歩の難しさの理由にし、欧州各国が統合への歩みに示した意欲と努力を客観的に評価するのを怠って、現に行われている国家連合の大実験から教訓を学び取ろうとする姿勢を根底から否定するのに用いているかのように思われる。

繰り返しになるが、欧州各国はキリスト教・西欧文明として共通または同質の文化を有する国々ではない。EUは各民族・各国家の固有の文化を許容し、その違いのうちで協調し作り上げてきた諸原則・制度・規則等の領域で共通に遵守すべきものを「アキ・コミノテール」に集大成し続けているのである。アジアには文化の異なる国々が集合していることは事実である。これらの国々で近代国家としての制度や枠組みにこの文化の相違が組み込まれている深度は正確には測定できない。同時に「文化の違い」ではなく「各国の近代国家としての発展段階の相違、経済・政治の規模・水準の大きな格差」などが統合への根本的な障害として存在していることは間違いない。大事なことは日本が国際社会で孤児とならないためには、アジアの統合という目標に向かって可能なことから行動していくことだ。

海の向こうで：小さな国際人たち

ボンタン LNG トレイン H 投資 (株) 宮入 宜人

日本国籍を有している人のうちで海外に居住している人々についての統計を調べてみました。外務省の「海外在留邦人統計」によれば、昨年10月現在で、長期滞在者75万人、永住者34万人あわせて109万人の日本人（日本国籍を持つ人）が外国で生活しています。日本国民全体の1パーセント弱です。その内訳を地域別にみると、第1位が北米で42万人、第2位がアジアで29万人、以下西欧、南米、大洋州、中米・カリブ、中東、中・東欧・旧ソ連と続き、最下位がアフリカで、わずか7千人です（厳密にはこの下に南極35人という面白い数字があります）。この7千人という数字は、都市別の統計で比較すれば、ちょうどアメリカのデトロイトに居住する日本人の数と同じで、つまり、あの広大なアフリカ大陸に住んでいる日本人の数がアメリカの田舎町（自動車産業関係の方ごめんなさい）に住んでいる日本人の数と同じ、ということになります。TICAD IV でアフリカ支援を打ち出しても、こんな少ない人数で一体何をすればよいのか、ということです。在留邦人数を国別でみると第1位がアメリカ37万人、第2位が中国13万人です。97年の統計では在中国の邦人数は2万人でしたから、この10年間で驚異的な速度で増えたことがうかがえます。

全世界に居るこの109万人のうち、義務教育学齢期の子供達の数も把握されています。全世界で約6万人の小・中学校年齢の子供達が居るようでして、わが国政府はこの子たちの教育について、それなりの配慮をしています。世界中に日本人学校、日本人補修校が開設されています。日本人学校というのは週5日制の小・中学校でして、ここに通う子供達は現地校には通わず、日本に居るときと同じように日本語での教育を受けます。日本人補修校というのは、土曜日の一日だけ開校されるものなので、子供達は月曜から金曜日までは現地の学校に通って現地語（あるいは国際校の場合英語・フランス語など）での教育を受けたうえで、土曜日に日本語での教育を受けることとなります。言葉のハンディがあって、ただでさえ厳しい現地校での生活を週に5日送った後、土曜日にまた授業——というのは気の毒な気もします。しかし、週に一日、気のあった仲間と日本語での学校生活を過ごす喜びを感じる子供達も多いようです。また、国（都市）によっては日本人学校も日本人補修校もなく、邦人子女は全員現地校に通学、という場所もあります。前述6万人の内訳は、日本人学校1.9万人、補修校（現地校にも通学）1.7万人、現地校のみが2.5万人となっています。昔は外務省・文部省の方針として、日本人学校の開設については、欧米先進国ではなく、途上国を優先させていましたが、現在でもその傾向がうかがえます。例えば北米（アメリカ・カナダ）では、日本人学校（小・中）通学者の数は477名に過ぎず、それに対して補修校11779名、現地校のみ8789名です。学校の規模も様々で、現在最大の日本人学校（小・中合計）は上海の2877名です。上海の小学部2290名というのは、もしかしたら、日本国内も含めて最大の規模かもしれません。行ったこ

とはありませんが、通学風景など壮観でしょう。最小はどこかな、と思って統計表を眺めていたら、グアテマラに小・中それぞれ1名ずつ計2名というのがありました。上海やバンコク、シンガポールなどの大規模校は別として、海外の日本人学校・日本人補修校は一般的には、こじんまりとしていて、日本から派遣されている教師の質も高く、親も教育熱心、子供達も仲良く学校生活を送っていると言われていています。通学先の学校の形態は様々ですが、この子たちが日本に帰ってくると「帰国子女」と呼ばれます。平均海外居住期間を3年と仮定すると、毎年約2万人の「帰国子女」が新たに生まれることとなります。時にはいじめの対象となることもあるらしいのですが、異文化の中でたくましく育った子たちも多く、沈滞しがちな日本社会に一定の活力をもたらしている層だと見ております。帰国子女（特に欧米からの）は自己主張が強く協調性に欠けるなどというステレオタイプが流布されていますが、それは違います。自己主張は確かに強いかもしれませんが、それは、人間ひとりひとりが違っているという認識に発しているのもあって、没個性集団社会の中で多数派に迎合している人たちより、ある意味でよほど協調性があるとも言えると思います。

我が家の二人の娘（77年と80年生まれ）は、私の転勤のため、83年から85年ニューヨークに、96年から99年ワシントンに住んでいました。最初は現地小学校と幼稚園、2回目は現地高校と大学でした。ニューヨーク勤務当時、日本人学校はなく、補修校はありましたが、土曜日をつぶすのがもったいないので行かせませんでした。そのかわり、長女は週に一日夕方に「公文式」の塾（80年代のニューヨークには既に存在していた）に通わせて、国語能力を維持させていました。2回目のワシントンでは、日本の大学を休学した長女は現地の大学へ、次女は近所の公立高校へ通いながら土曜日は日本人補修校に通っていました。補修校は小学部・中学部が中心なのですが、ワシントンの場合高等部も併設されていて、高校生は全学年で20人くらいだったでしょうか、先生方の指導のもと、小学部・中学部の子達の面倒を見ながら、皆で楽しく日々を過ごしていました。次女にとって、このときの仲間はとても大切な友人のようで、今でも折りに触れ集まっているようです。

私自身は初めて海外に出たのが74年、24歳の時、アメリカニューメキシコ大学大学院への留学でした。既にある程度英語も出来ていたし、色々な知識もあったはずですが、それでも、初めて太平洋をわたりサンフランシスコに着いた時の心細さを憶えています。その一方でこれから始まる生活に対する期待感から来る、高揚した気分などもありました。大人でさえ不安なのですから、年端もいかない子供達の心細さは察するに余りあります。ちょうど25年前の5月にニューヨークの空港に到着した家内と二人の娘を出迎えに行った日のことを今でも思い出します。小さなリュックを背負い、母の手をぎゅっと握り締めて、初めての外国の地に降り立った二人の表情には「不安」「戸惑い」「違和感」といった様々な感情が入り混じっていました。その後日帰りサマーキャンプのお遊びなどで、少しづつ慣らしながら、9月には現地の小学校と幼稚園に入学させました。幸い、周囲の素晴

らしい方々（特にアメリカ人教育関係者）のおかげで、結果的に二人の学校生活はとても楽しいものとなりましたが、それでも最初のうちは苦労したようです。考えてみれば、英語の「え」の字もしらない子供をいきなり完全英語環境に放り出すのですから、相当に無理があります。しかし、他の多くの日本人の子供達と同様に、この苦労を上手にくぐりぬけたことは、その後の二人にとって大きな財産となりました。

今でも成田や海外の空港などで、明らかに普通の旅行者とは違う、荷物の多い海外赴任途上の母子連れを見かけることがあります。25年前のJFK空港での家内と娘達の姿と重なり、心の中で思わず「頑張ってね。」と声をかけたりします。それが何年になるのか、どのような教育を受けることとなるのか、場所により人により様々ですが、子供のころから、言葉や価値観の異なる社会に身を置いて、苦労したり楽しんだりすれば、他人の痛みや苦しみを理解して行動できる真の「国際人」ができるのだらうと思いますので。

以上

グローバルフェスタ参加お知らせ

学生部

大塚 美奈子

今年も、10月4日5日両日に日比谷公園にて行なわれるグローバルフェスタ2008に参加させていただけることになりました。

昨年は、両日とも団体説明を主体に、一定の時間ごとにエチオピア、カンボジアのスタディーツアー参加者によるスタディーツアー説明会を行い、更に展示として過去に行なわれた勉強会のレジュメ公開、及びスタディーツアーの写真を展示いたしました。また、テントの前ではFREE HUGS(*)というイベントを行い、多くのグローバルフェスタ来場者と交流を行ないました。

今年も昨年同様、団体説明を主軸におき、それぞれスタディーツアー説明会、勉強会資料公開、スタディーツアー写真展示、そして随時希望する参加者には学生部MLへの登録を案内していく予定です。これにより、大学生及び大学院生を主な対象に、後期から学生部勉強会に積極的な参加を行なってくれる新規参加者、学生部としてスタディーツアーに参加することに興味を持ってくれる人、また学生部の運営自体に参加をしてくれる人を獲得することを目的としています。

昨年度及び今年度前期においては、勉強会・スタディーツアーに参加してくれた人達のその後の学生部への定着率が低く、学生部の執行も高学年が中心となってきました。今回のグローバルフェスタにおいて、少しでもSRID学生部に対して興味を持ってもらい、更に活動の中心となっている勉強会に足を運んでくれるような新規加入者を得ることができればと思い、学生部一丸となってグローバルフェスタの出展に望む所存です。

*FREE HUGS: アメリカにおいて、ジェイソン・ハンター氏によって始められた運動。見ず知らずの者同士がハグし合うことで、お互いに愛や温もりを感じようというもので、日本でも渋谷駅前などを中心に”FREE HUGS”と書かれたボードを持つ人が見られます。